

## 59. 高島郡高島町鴨遺跡で 発掘された中世の足あと

### 1. はじめに

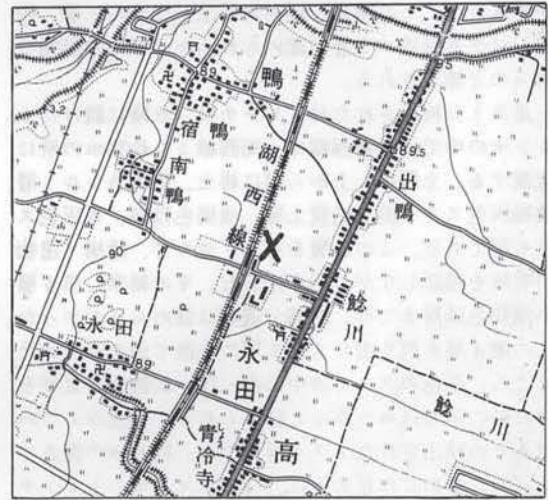
過去の世界の足あとといえ、どうしても化石のイメージが先行する。それくらい足あとは古生物学の世界では大きなウエイトを占めており、単に足あとだけでなくゴカイや貝類のはいまわった跡さえも残されている。

さて、古世物の世界ではおなじみの足あとが、考古学の世界に登場し、遺構(?)としての市民権を得たのはここ数年のことで、最近の相次ぐ水田址発掘の副産物ともいえよう。

ところが、今から18年前の昭和36年に早くも足あとは発掘されている。群馬県勢多郡赤城村の宮田遺跡で偶然古墳時代の水田畦畔が発見され、小規模とはいえ水田一区画分を確認するという画期的な調査があった。この遺構は畦畔を切って水口があり、田面には足あとのようなくぼみが21ヵ所見られたという。ところが残念なことに、その当時は類例がなく、群馬大学史学会「時報」第25号に報告されたまま忘れられてしまった。

近畿地方では、昭和39年に大阪府茨木市にある古墳時代前期の前方後円墳將軍山古墳を発掘した際に、竪穴式石室を解体し、粘土棺床を除去した時に足あとが発見されている。足あとは粘土に残されており、このことから粘土棺床をつくる時、粘土の塊をよく足で踏んでこねながら成形したものと考えられている。ところがこれも、竪穴式石室の粘土棺床という特別な場所であったためか、その後しだいに忘れられていったようである。

足あとに再び日の光があたるようになったきっかけは、群馬県高崎市日高遺跡、熊野堂遺跡などの水田址に伴うもので、足あとのくぼみに火山灰が堆積したもので、黒色の旧耕土と白黄色の足あとが一目で判別できる。また火山灰の性質から、乾燥すると粉のようになり、比較的足あとの検出は容易であったと伝え聞く。また西では、福岡県福岡市の板付遺跡から、やはり水田址に伴って足あとが見つかった。ここでは旧耕土に残された足あとのくぼみに砂がかぶった状態で発掘されたため、足あとの砂を水で洗い流すと比較的容



第1図 遺跡位置図

易に検出できたという。

本県においても守山市服部遺跡で水田址が発掘された際、足あとの検出がおおいに期待されたのであるが残念ながら確認できなかった。ところが昭和54年9月に、高島郡高島町鴨遺跡で中世のものではあるが足あとがあざやかに検出され話題をまいた。以下鴨遺跡での足あと調査の状況を紹介し、今後の同様な遺跡調査の一助としたい。

### 2. 鴨遺跡の立地

鴨遺跡は、高島郡高島町鴨に所在する。

高島町鴨は、鴨川が北方に大きく廻り込んだ所に位置する。現在の鴨川は、天井川化してしまっており、降雨時か春の融雪時にしか水量の増さない河川となっている。しかし、近接する出鴨遺跡等の発掘調査の結果を見ると、平安時代の層まで約2m程の土砂の堆積が知られており、鴨川の沖積作用がかなりの規模であったことがうかがわれる。また、嶽山麓音羽から現在の鴨川までは、地形的に高低が見られ、この微高地の上に、永田・南鴨・宿鴨等の各集落が位置する。このことは、鴨川の流路が一定ではなかったことを想定させる。つまり、現在の集落が位置する微高地は、ある時期の自然堤防であったと推測されるのである。

鴨遺跡は、南鴨の集落が位置する微高地の東半分にあたる。ここからは、掘立柱建物群を中心とする遺構と、施釉陶器、木簡、銅印等多数の多彩な遺物が出土

し注目されている（鴨遺跡については、高島町より調査概要が昭和54年度に刊行されるので参照願いたい）。

### 3. 足あとの検出

足あとの検出地点は、鴨遺跡の中心部の東側、湖西線をさらに東側へ越えた所で、小字名では「三ノ坪」にあたる。

この地区の調査は、ほ場整備の水路予定地にトレンチを入れた。その結果、現在の耕土下でシルト層、砂層、スクモ層等の土層が認められ、かつては強湿地であったと推定される。

足あとが検出されたトレンチは、水路に設けたトレンチの中では一番西端で、湖西線より約30mの所に位置する。土層は、上から順に耕土、褐灰色シルト層、濃褐灰色スクモ混り粘質土層、淡褐色砂層、茶灰色スクモ層である。この各層をバックホウで、遺構・遺物の有無を確認しながら掘り込んだ。その結果、第4層の淡褐色砂層までは、遺構・遺物は認められなかった。この第4層を取り去りスクモ層の上面で面をそろえたところ、茶色のスクモの中に白っぽい20数cmの足型をした砂の落ち込みが点々と認められた。表土からこの足あとの検出されたスクモ層までは、約90cmの深さであった。なおこの足あとは、1.5m×7mのトレンチを横切る形で続いていた。

### 4. 足あとの発掘

以上のような状態で足あとは検出されたのであるが、その発掘手順を以下に記す。

鴨遺跡一帯は、地下水位が高く、砂層からの湧水が

非常に多い。その為に、トレンチの壁際に排水溝を掘り、一カ所に集水して水中ポンプで排水した。しかし、スクモ層からの水の汲み出しもあり、遺構面は常に水を冠っていた。

スクモ層は非常に柔らかく、直接踏むと足あとがついてしまうので、足場板を渡して遺構面を踏まないようにした。この状態で面を清掃し、足あと検出状況の写真を撮影した。

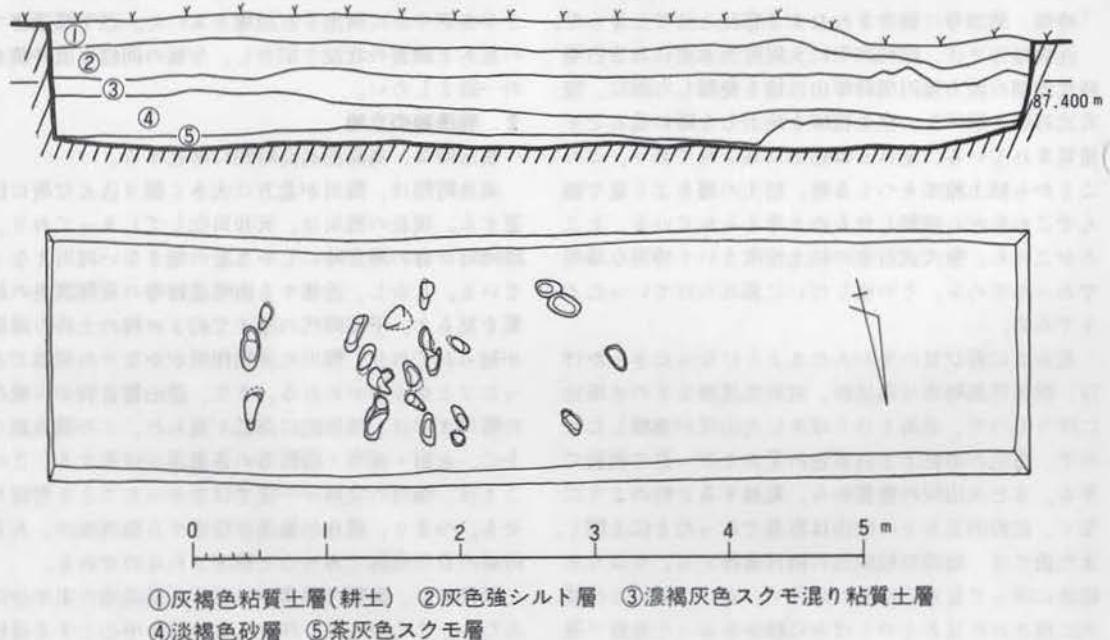
足あとの掘り込みは、スクモ層の中に落ち込んでいる砂を取り除けばよく、発掘としては非常に簡単である。当初は竹べらを使って掘っていたが、これでは砂をうまく取り出せないため、スプーンを使用した。スプーンだと、曲部の砂もうまく取り出せた。このような方法によって、検出した足あとを全て掘り出し、その後写真撮影および実測を行って終了した。

### 5. 足あと

調査した足あとの総数は、21個である。この足あとは、複数の人の足あとで、一方向に歩いた足あとを1人のものとして数えれば、5人分ある。歩いた方向は、ほぼ南北の向きを持っている。

足の大きさは、平均で約23cm、足幅約10cmである。このうち最大のものは、長さ25cm、幅11cmであった。歩幅はほぼ50cmかそれ以下であり、平地の歩幅より狭い可能性が強い。

足あとは、スクモ層の中に10cm以上めり込んでいたので、形が明瞭に残っているものが多かった。しかし、足型から見れば、親指は明確に識別できたが、他の指



第2図 足あと検出トレンチ平面および断面図

ははっきりとその形の確認できるものはなかった。多くの足あととは、爪先が深くめり込み、ハイヒールを履いた時の足の形をしていた。これは、爪先立って歩いたか、泥の為に爪先に力が入ったかであろう。また、踵が非常に小さいものは、足を泥から抜く時に踵から上げる為に、土がまわりから押された為であろうと想像される。この様に、足あとを調査してみると、当時の人が泥の中を歩いた様子が眼前に浮び、たいへん興味深い。

#### 6. 足あとの処理

写真撮影、実測の後、石膏で足あとの型取りの作業を行った。これは、個々の足あとと、歩いた様子がわかるように面的に採ったものと二種類行った。

個々の足あととは、歯科医で歯型を採るのに用いるアルジックスを使い、まず足あとの雄型を採った。その後、石膏で裏打ちして検出状態の雌型を作った。アルジックスは、はじめて使った材料でもあり、ともすれば石膏の混ぜ方が不足で固りきらなかったり、混ぜ過ぎで早く固まってしまう足型が採れなかった失敗もある。

歩いた状態を面的に採ったものは、掘りあがった足あと群に直接石膏を流し込んだものである。このレブリカで個々の足あとの相互の関係がよくわかるであろう。ところが、この際に使用した石膏は30kg程あり、取り上げの際に重くてなかなか持ち上げにくかった。

#### 7. おわりに

以上、鴨遺跡で検出された足あとについて書いてきたが、書き残した点を補足しておきたい。

まず足あとの検出されたスクモ層の年代である。この層からは、少量ながら平安時代末から鎌倉時代前半に編年される土師質土器の小皿が出土している。これが、足あとの年代を表わしていると考えられる。

また、足あとが残された時の状況であるが、スクモ層に水が冠って泥々の状態では明瞭な足あとは残りにくい。発掘時にスクモ層を水の中で掘ると、泥水と



なって流れ出すことから、足あとが残された時点では、ある程度の固さを保っていたと考えられる。そしてその後、足あとが崩れる前に砂が流れ込んだのであろう。この砂の為に足あとが現在まで保存されたのである。

次に、足あとと同時代の鴨遺跡の周辺状況についてである。鴨遺跡の調査と同時に、戸が坪・出鴨遺跡の調査が行われ、その結果、足あとに近い時代の条里畦畔が確認されたと聞いている。この鴨地区に条里に基づく水田が広がっていたと考えてよいだろう。このことから、足あとが湿地ではなく、水田に残されたものと見る可能性が強調される。しかし、条里遺構の検出面は青灰色粘質土層であり、足あとのそれとに違いが見られる。この問題は、今後スクモ層の花粉分析等の結果をまわって再考せねばならないだろう。

足あと出土地点の調査は、ごく小面積であり、今後今回検出された足あとの延長線上の調査を実施すれば、より多くの事実がわかるであろう。

足あとは、その人の身長、体重等を推定させる人類学的な資料になるばかりではなく、性格や歩いていた時の心理状態までわかるといわれている。こうした観点から、人間自身を語る面白い資料になるだろう。

(本田修平・兼康保明)

## 60. 高島郡マキノ町

### 仏性寺遺跡出土の田下駄

ほ場整備事業に伴う、マキノ町蛭口に所在する仏性寺遺跡の調査は、昭和53年4月に実施され、多くの成果を得た。調査の結果、明確な遺構は確認出来なかったが、遺跡の中心部では、耕土を剥ぐと直ちに上下2層の遺物包含層になることが判明した。上層は、スクモと呼ばれる茶褐色の腐植土層で、弥生時代中期の土器、奈良時代の須恵器から中・近世までの土器片、及び、加工木、自然木等が含まれていた。また、下層は、

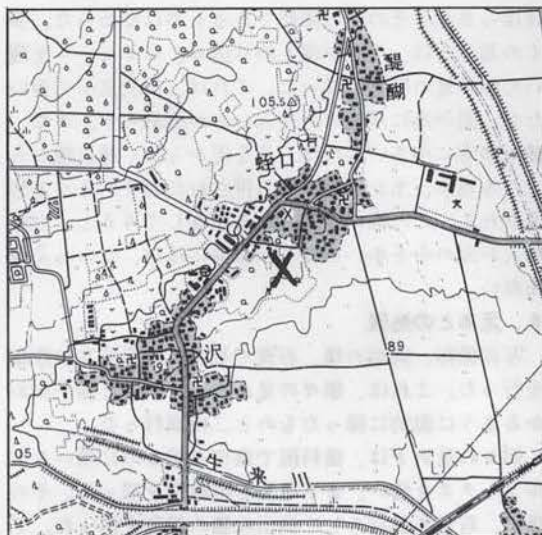
青灰色粘土層で、縄文時代後期の土器・石器を多量に含んでいた。その詳細については、調査報告書に譲るとして、今回紹介する田下駄は、調査終了後、ほ場整備の際地元の方によって発見され、マキノ町公民館に届けられたものである。発掘調査の結果から考えて、ほ場整備の際に一部攪乱されたと思われる、上層のスクモ層内に含まれていたものであろう。

現存する足板の寸法は、長さ38cm、幅12cm、厚さ約2cmで、材質はおそらく杉材を用いていると思われる。形状としては、両端近く側面両側に、杵をとりつけるためのえぐりが入れている。前緒孔と横緒孔の前後の間隔は10cm、横緒孔の相互間隔は9cmを測る。注意す

べき点は、前緒孔が足の形に合わせて片寄せてあけられていることである（本品の場合、右足用であるので左側に片寄せてある）。この片寄せについては、古代下駄に共通することであるといわれており、前述したように、出土したと考えられるスクモ層内にも該当する時期の土器が見られる。しかし、時期幅は広く、早くて弥生時代中期、下れば奈良時代までが対象となることから、詳細な検討は難しい。鼻緒をすげる孔は不整形で、後述するように、現代の田下駄の孔が、三つ目錐などで正円に穿たれているのに対して、のみや小刀のようなもので穿った感が強い。

裏面には、当初木の枝などを曲げて作った枠が存在したと思われる圧痕が、両端近くに認められる。表面の後端近くにも、枠を取りつけた際の紐痕かと思われる痕跡が見られる。枠は残念ながら発見されてはいないが、これまでにも、静岡県登呂遺跡・山木遺跡などで出土している田下駄の大半が、足板しか見つかっていないことなども考え合わせて、柳の枝などを使用していたとしたら、おそらく材質に影響されて残りが悪いと考えられる。

本例と同様な田下駄の出土例は、県下においては、まず野洲町久野部遺跡の7世紀前後の時期と見られる出土例に類例が見られる。両者を比較してみると、久野部遺跡出土例の方が本品よりも細長い。また、足板の中央に、補強棒を渡している痕跡が認められる。鼻緒孔の間隔はほぼ同じである。久野部遺跡の例も足板のみで、枠は出土していない。一方、新旭町森浜遺跡の出土例は、足板の形状こそ異なるが、楕円形の枠が



遺跡位置図

完全に残存している輪螺型田下駄で、足板の両端にえぐりを入れる代りに、足板の四隅に孔を穿ち、蔓などを通して枠を取りつける方法を用いている。時代的には、弥生時代後期と考えられている。同じく新旭町針江遺跡でも、森浜遺跡出土例に似た足板と枠の先端の部分が出土している。

地形的に見ると、ほ場整備の行われた蛭口は、知内川と百瀬川にはさまれた氾濫原に位置し、「シルタ」と呼ばれる深田が多い。そういった田では、近年まで田下駄が使用されていた。ほ場整備の際に採集した現在の田下駄を見ても、足板は、長さ39cm、幅14.5cm、厚さ1cmで、四隅が斜めに切りおとしてある。それぞれの鼻緒孔は、正円形にきれいにあけられており、前緒孔が両横緒孔の中央に位置し、二等辺三角形となる。枝を曲げて作った楕円形の枠を、固定するために針金を使用しており、前後2ヵ所に、補強板が釘で打ちつけてある。鼻緒は、以前は藁縄であったろうが、今はビニール縄に変わっている。枠と足板のバランスを考えると、足板の方が大きいように思われる。また、出土品に比べて足板が幅広であることがわかり、興味深い。

仏性寺遺跡は、調査中も湧水が激しく、周囲の休耕地や沼沢地には、葎などが生え、低湿地の様相を示している。このことを考えあわせてみると、多少地下水位の変化はあったとはいうものの、古代の田も深田や泥田であったろうと、容易に推定できる。当時の田の大きさや、稲作技術がどの程度のものであったかは推測し難いが、現在の田下駄が稲刈り時に使用されていることなどから、仏性寺遺跡出土の田下駄もまた、同様に、深田や泥田での稲刈り時に、田にもぐるのを防ぐために使用されたものと考えられる。（山口順子）

